

日本における観光研究・観光学の展望

～地域とグローバリゼーション、文化とマーケティングの視点から～

Vision of Tourism Research in Japan

小林 裕和*

KOBAYASHI Hirokazu

日本における観光研究は、学際的なアプローチと独自の学問体系を探る努力がされながらも、現在なお統一された学問体系は構築されていない。観光研究あるいは観光学など、使われる呼称も研究者によって異なるのが現状である。本論文では、近年の観光動向であるグローバリゼーションと地域、文化とマーケティングという分析軸を用いながら、観光を研究することの意義を問い直し、観光研究の体系化について考察した。合わせて今後の観光研究について展望した。

キーワード：観光研究、観光学、グローバリゼーション、文化、マーケティング

1. はじめに

世界のグローバリゼーションが進んでいる。グローバリゼーションとは、グローバリズムが拡大することである。グローバリズムとは、「相互依存関係のネットワークがいくつもの大陸にまたがって広がっている世界の状態をいう」¹⁾。ネットワークは、資本や財、情報や考え方、人や力、環境や生物学に関連する物質の流れや影響によってつながっている。民族や文化の違い、資本主義や共産主義かといったことを問わずに、観光客が国境を越えているとすれば、観光もグローバリゼーションが進んでいるといえる。そこで観光研究者は、観光のグローバリゼーションに対して、新しい課題を抱える。その際、観光研究者はといったどのような分析軸を持ちえるであろうか。貿易収支を取り上げるなら、経済学を援用した観光経済学が適用できる。先進国と発展途上国との関係なら、観光人類学で解釈できる。それでは「観光学」的なアプローチがあるとすれば、どのような手法論を持ってグローバリゼーションから生じる課題に取り組むことができるだろうか。

日本においては、学問として体系化の必要性が指摘されながらもいまだに体系化されないままに²⁾「観光学」と呼ばれている。観光を対象とする研究は、研究対象である観光という社会現象が複雑であるがゆえに学際的なアプローチを認め、「観光研究」と呼ばれる場合もあるが、「観光研究」と「観光学」を特に分けない

で用いる場合もある²⁾。

観光研究の中には、体系化について意識されその努力がされている分野もある。例えば観光地理学は、「持続可能な開発」が提唱されてから、観光地理学的なアプローチにより、「持続可能な観光」についてすでに多くの研究の取り組みがされている³⁾。体系化された学問は新たな課題に対してもアプローチできる。先に指摘したようなグローバリゼーションのような課題に対しても取り組むことが可能であろう。

本研究では、近年の観光の課題を取り上げながら、その社会的な意義を問いかける。その上で観光研究の体系化の必要性を検討し、現代の観光に関する課題についての分析軸を提示し、観光研究の今後の展望を試みる。なお、本論文では観光を対象とした研究を総称して「観光研究」と呼び、現在実現しているかどうかは別として、独自の学問体系を持つ観光研究を「観光学」と呼ぶこととする。

2. 観光学の課題

(1) 観光研究の意義

観光の「学問」に対する社会の期待はどのようなものだと考えられるだろうか。あるいは、観光研究は社会にどのような貢献ができるのであろうか。塩田は観光論の役割は、「観光現象をいっそう健全に発達させる諸方策を探るための基礎としての基本的理解を得る

* 株式会社ジェイティーピー (JTB) 国際旅行事業部

ため」としている⁴⁾。しかし一般に、観光や観光事業が社会に対する影響や貢献については議論されているが、観光研究自体の貢献は議論されることが少ない。すなわち、観光の意義は議論されていても、観光を体系的に研究することの意義については、明確にされていないのではないかと。学問の意義が明確でないままにその体系化を試みることは難しい。

グローバルな地域経済圏レベルから、一国の政府や地方自治体のレベルにいたるまで、観光が期待されている。そもそも観光は、戦前の外客誘致の時代から、政策として重視されてきた歴史もある。例えば1948年には、東京都総務局観光課が、「一般都民に対する観光理念の普及徹底と、本事業の助長振興並に本事業関係者の資質向上に寄与貢献するの見地より」「斯界の権威者を網羅して観光講座を開催」⁵⁾⁽¹⁾している。その講座の速記録が残されており、その章立ては以下の通りとなっている。

「観光の理論と実践」

一、総論

1. 観光立国論、2. 観光産業論

二、観光事業の理論

1. 観光事業概論、2. 観光資源論、3. 観光と都市計画、4. 観光東京の今昔譚

三、観光事業の経営

1. 観光事業経営論、サービス論、観光宣伝論、見返品と観光物産、5. 新たに発展を想像される観光事業の話、6. 観光施設論、7. 接客の実際

四、国際観光一般

1. 戦後の海外観光事情、2. アメリカの印象、3. 欧州旅日記、4. 観光と自然、5. ガイド商売往来、6. 日本風土記

時代背景があるので、現代と比べれば、その分内容は古くなってはいるが、中には現在十分通用する理論もある。ところで、この「観光の理論と実践」では、すでに「観光資源」を「自然資源」と「文化資源」に分類し説明している。田中喜一が観光資源を自然的条件、文化的条件などに分類したことが、日本の観光において文化観光、自然観光の領域が登場したと考えられるとする場合があるが⁶⁾、「文化」と「人文」と用語に違いはあるものの、昭和30年当時にはすでに自然資源と文化(人文)資源を分類することは一般的だったと考えられる。

この文献では、観光事業の国際的意義、文化の交流としての国際的意義など、「政治的、経済的、文化的」意義について明記されているものの、観光を研究すること自体の意義については記述されていない。

現在では、政府の「観光立国」政策もあり、観光の重要性がクローズアップされている。ここで観光研究の意義を問い直すことは、今後の観光研究の体系化のために重要なことである。

(2) 体系を持つ学問のメリットと課題

塩田が観光論を、体系がまだ整備されていない段階の観光学としたのが1974年である⁷⁾。その約30年後、溝尾は観光関連学会が総力をあげて、観光学の体系に取り組みべきと指摘している⁸⁾。つまり観光研究はいまだに体系化の努力がされている途中の段階と見てよい。体系化されていない学問は学問の発展上、いくつかの課題が生じる。まず観光を研究対象とするとき、その前提となる学問的知識を備えていなければ研究活動に困難が伴うが、では、どの程度のレベルまでその学問を学べば基礎を学んだことになるのだろうか。観光学の基礎知識とは何か。仮に大学生が初めて観光を学ぶとき、何を知ることにより「観光学を知った」ことになるのか、現在は明確なものはない。もちろん大学によって観光学のカリキュラムが組まれているし最低限共通の部分はあるかもしれないが、現時点では大学によって異なっている。

2つ目に、基礎知識が明確にされないと、何が最先端の研究なのか不明瞭である。例えば、入門書として編集されたにもかかわらず、「一般的な解説書の域にとどまらずかなり専門性の高いところまで論じ」た著書は⁹⁾、観光という幅広い現象を扱う研究書としては評価されるが、結果として、読者である研究者が理解できるところまでがその読者にとっての入門編、理解できない部分は「専門性の高いところ」ということとなり、あまり親切な方法ではないかもしれない。

さらに、学問としての基礎の範囲が不明瞭、ということは、基礎と考えると身につけた知識も、先行研究として広く理解され議論されることがないまま、新しい解釈が生まれることになる。結果的に研究としての蓄積がなされない。例えば政府が訪日外客数を2010年までに1000万人にするという目標を掲げた政策である「ビジット・ジャパン・キャンペーン」が現在脚光を浴びているが、国際観光振興という観点なら、すでに日本は戦後観光政策を行ってきた。もちろん当時と現

在とでは観光を取り巻く環境は大きく違っている。しかし観光事業を推進することにより国の経済、文化を発展させる、という問題意識はすでに戦後からあり、この点において現在の問題意識と大きくは変わっていない。理論あるいは実践レベルで当時と何が違って何が同じなのか、ということが明確にされていれば、観光研究者が国際観光を研究対象として取り上げる際に、過去の経験が蓄積され学問的な発展も見込めるだろう。

3つ目に、手法論の確立の問題がある。ある観光の現象に対して、分析のアプローチの仕方がわかりにくい。観光が実際に起きているのが地域だとすれば、フィールドワークは有効であろう。しかし、観光の動機付けをされるのが観光客の生活の場だとするならば、例えばインターネットで観光情報を収集するような行動に対しては、別の分析手法が必要となる。観光現象の状況ごとに、決まった研究手法が体系化されていないため、この点において、他の研究分野の手法と現象へのアプローチのしかたを借りてくるしかない。観光という現象に対して独自のアプローチを構築することが競われれば学問の新たな発展につながる。

以上のような課題は、観光研究の、政策や事業という実務への応用も難しくしている。観光研究の意義を問う理由はまさしくそこにある。観光事業者の意識として、観光学の有用性はあまり認識されていない。もちろん学問することの意義と活動は否定しないが、社会的な意義、あるいはビジネス上の意義が十分に認知されていないものに対して期待を求めることは難しい。例えば9.11全米テロの直後、本来観光の意義を誰よりも知っているはずの観光研究者から、観光への影響を訴えることはなかった。

外国では観光の経済的な影響などの議論を経て、1960年代にはすでに観光研究の学問としての体系化が始まった。それは観光の隠れた社会文化的な構造を明らかにしようとする時代となってきたからであり¹⁰⁾、1973年にはAnnals of Tourism Researchが発刊された。このジャーナルは、観光の理論と実践の両面から、概念的な構造を発展されることに貢献し、理論的な統合と、学際的にいくつかの手法論を発展させる役割を目指しているという。

3. 現代観光研究の分析軸

「観光学辞典」¹¹⁾によれば、「観光」と名のつく研究分野だけで15を数える。そのうち、「学」となってい

るものは、観光学、観光地理学、観光経済学、観光経営学、観光心理学、観光社会学、観光人類学、観光民俗学の8つである。加えて、2003年には「国際観光学」をタイトルとした書籍も発刊された¹²⁾。

さて、これだけ多い観光研究の対象分野であるが、観光学としての体系化をすすめるにあたり、現代の観光は、どのような分析の切り口を持てばいいか。もちろん多くの切り口があると考えられるが、ここでは2点の分析軸を提示したい。ひとつは「マスツーリズムの周辺諸課題」について、もうひとつは「地域の問題」についてである。

(1) 文化とマーケティング

観光研究の基礎が確立していない問題の典型的なもののひとつに、「ステレオタイプなマスツーリズム批判」がある。それは、一般的には観光の大衆化による観光地への負の影響などを指している。マスツーリズムによって、観光地が衰退の過程をたどると指摘されることもある¹³⁾。

しかし批判の対象となるマスツーリズムは現在なお廃れていない。存在する価値があるということだ。価値はマーケティングから文化にまで考えられる。観光の事業的な側面からすれば、ビジネスの努力の結果として多くの観光客が来ることを目指す。もちろん観光客の数だけがターゲットではない。在庫を持たず、生産と消費が同時に行われるサービス業では、ある一定期間の収益を最大化することがビジネスの目指すところとなる。それをレベニューコントロールという。しかし、観光地における多くの観光事業者（旅館、土産屋、飲食業など）は中小規模の企業である。まずは閑散期をいかにのりきり売上を立てるか、ということが優先的課題となるだろう。つまりマーケティング活動は、観光客を呼び販売量を増やすことが目的となる。

さらにマスツーリズムは、観光客のニーズの結果という側面でもある。いわゆる「メディア型」の旅行商品への参加者はリピータも多く、けして旅慣れていないわけではない団体旅行ではない。一種のコミュニティとしてツアーを利用し、仲間と行く旅行を楽しんでいる。マスツーリズムを解釈するには、観光行動の動機付けレベルにまで踏み込む必要もある。

そのような消費活動の一方で、観光は文化的な側面も持ち合わせている。それは特に観光研究が観光の経済的效果に焦点があてられていた反動として強調される。消費も文化のひとつではあるが、それも含んだ「観

光文化」という概念も提唱されている¹²⁾。

観光の行動心理から、マーケティング、そして文化までをひとつの分析軸として取り上げたい。

(2) グローバリゼーションと地域

観光は、出発地から目的地という時間、空間を必然的に持っている。この空間のスケールは、さらに、国内だけのものから、国内と海外（国際と呼ぶ）の移動に及ぶものもある。観光研究が対象とするものも、日本のある地域の活性化の問題や、都会と地方の問題から、国家間の貿易収支や先進国と発展途上国の問題まで、さまざまである。

日本はこれまで WTO 交渉をベースとした対外経済関係から、WTO 協定との整合性を取りつつも FTA (自由貿易協定) による戦略に舵を取り始め、2002 年には、シンガポールとの EPA (経済連携協定) を締結した。協定には観光分野における協力が盛り込まれている。ここに本来観光研究者が貢献すべきフィールドがある。国際旅行の場合、日本人の海外旅行、もしくは訪日インバウンド旅行として議論されることは増えてきたが、国家間の政策として議論されることは少ない。国家レベルでどのような政策がとりうるのか。観光研究がどのような貢献ができるのか。今後日本では経済連携を積極的に進めようとしている。観光は、経済摩擦が生じにくい。観光により相互理解が進む可能性も想定され、EPA に対して積極的な役割を果たせる分野である。

一方で、さらにミクロな地域レベルではまた違った課題がある。地域活性化の課題である。このようにこの分析軸は、スケール、空間を主軸として、観光現象を広く解釈することに役に立つ。

4 . 結果とまとめ

観光研究者が、観光の学問として体系を上げること、つまり「観光学」という学問を構築するために、現代観光の課題となっているグローバリゼーションと地域、マーケティングと文化、という分析軸を用いて考察を試みた。観光が社会というシステムを発展させる要素を持っている、ということその現象の記述、解釈を通じて明確にできる、という姿勢こそがさらに求められる。

観光は人間が自然界において社会を形成すると必然的に発生してきた。好奇心から発生するものであり、ビジネスとしての損得だけではない。そして、人間の移動スケールは好奇心とともに、身近な地域からグロ

ーバルスケールまで拡大する。最近では「宇宙観光」が積極的に語られている。文化とマーケティングの交わる場所、そして地域からグローバリゼーションに至るまで、観光がある。社会から要求される観光研究の課題は常に拡大している。独自の体系を持つことにより周辺の学問分野とはまた違った解決策を、これら諸課題に対して迅速に提供することが可能となる。そうすることにより、観光学に対する社会的な期待も高まるだろう。

今回、観光研究の展望を試みるにあたり、他の学問分野における観光の動向をレビューするまでにはいたらなかった。学際的に観光現象を解釈するという立場からは考察が不十分だと認識している。しかし、学問としての体系化を目指すのであれば、周辺分野の学問の体系や手法を参考にしつつも、あえて、それらを援用せず、独自の分析軸を持つチャレンジも必要である。

観光は実社会で起こっている現象であるため、基礎理論と応用はお互いぶつけ合い高めていくものだと考える。時代背景と照らし合わせた過去の研究成果の調査については、観光の学問としての体系化に向けての課題としたい。

【補注】

(1)旧字体の漢字は一部筆者が変更した。

【参考文献】

- 1) ジョセフ・ナイ他 (2004): グローバリ化で世界はどう変わるか。英治出版、p14
- 2) 岡本伸之 (2001): 観光学入門、有斐閣、pp.23-24
- 3) Hall, C. Michael etc. (1999): *Sustainable Tourism*, Longman
- 4) 鈴木忠義他 (1974): 現代観光論、有斐閣、p.296
- 5) 東京都総務局観光課編 (1949): 観光の理論と実際、p.2
- 6) 北川宗忠 (2004): 観光文化論、ミネルヴァ書房、p.4
- 7) 鈴木忠義他 (1974): p.297
- 8) 溝尾良隆 (2003): 観光学 基本と実践、古今書院、pp.144-145
- 9) 堀川紀年他 (2003): 国際観光学を学ぶ人のために、世界思想社、pp. i - ii
- 10) Jafari, Jafar (2000): *Encyclopedia of Tourism*, Routledge, p. xvii
- 11) 長谷政弘 (1997): 観光学辞典、同文館、pp.14-22
- 12) 堀川紀年他 (2003)
- 13) 堀川紀年他 (2003): p.84